

尾辻かな子

LGBT政策情報センター代表理事・前参議院議員

セクシユアル マイノリティを もっと知ってほしい

渡辺めぐみ

社会学部准教授



の問題を教えてください。

そんな中で尾辻さんとお会いしたのは、あのシンポジウムのあとの懇親会の席でした。そして2011年に龍谷大学へおこしいただいて、お話ししていただくようになりました。さて、このような機会ですので、せっかくなので、尾辻さんがこれまでどんな経験をされてきたのかを、自己紹介もかねて、お聞きしたいと思います。

尾辻 私も渡辺先生と同じ、団塊ジュニアですよね。去年、ダブル成人式になってしまった(笑)。私は一般社団法人のLGBT政策情報センターを立ち上げて今、代表理事として、セクシユアルマイノリティの人権、政策について、講演会などで語っています。最初から人前で語っていたわけではありません。私は女性の同性愛者、レズビアンですが、そういう自分を受け入れるのは、すごく難しいことでした。テレビドラマや映画をみても、異性愛があたりまえで、異性愛でないのはおかしいという中で生きてきたので、そういう価値観が私の中にも内在化しているんですね。渡辺 幼いころから女の子は、「王子様と結ばれる」というハッピーエンドの童話ばかり聞かれますしね。

尾辻 友人たちが楽しそうに恋愛の話をするのですが、私はまったくついていけません。そのときに疑問に思ったのは、なぜ私

多くあるように思います。私の定義では、レズビアン・ゲイは、同性愛者ともいわれ、自分の恋人・パートナーを、同性の中から選ぶ人といったらよいでしょうか。バイセクシユアルは、恋人・パートナーは、同性から選ぶこともあるし、異性から選ぶこともあるという人、ということだと思います。さて、尾辻さんは、公職者(選挙で選ばれる議員など)としては、日本で初めて、同性愛者、レズビアンであることをカミングアウトされました。ですから今日は、セクシユアルマイノリティのなかでも、とくに同性愛者を中心としたお話をしたいと思っています。

さて、尾辻さんと私は、同じ年ですよ。尾辻 そうですね。

渡辺 私は大学院に入った1997年、22歳のときにジェンダーの勉強をするなかで、セクシユアルマイノリティの問題についてはじめて知りました。それまで全く知識もなく、深く考えたこともないのに、すでに私の中に差別意識が内在していたことに、はじめて気がつきました。

尾辻 そうなんですか。

渡辺 以来、いろいろと勉強していく中で、とくに私の専門の家族社会学をやっていくと、セクシユアルマイノリティの問題が非常に重要だと気がつきました。今は大学の授業の中で、セクシユアルマイノリティと家族

阪神淡路大震災を契機に

渡辺 「セクシユアルマイノリティをもっと知ってほしい」というタイトルで、尾辻さんいろいろなとお話を伺いたいと思います。尾辻さんは、LGBT政策情報センター代表理事でいらつしゃいます。セクシユアルマイノリティとひとくちにいつても多様ですが、とくにLGBTといった場合、L(レズビアン)、G(ゲイ)、B(バイセクシユアル)、T(トランスジェンダー)のことをさしますね。比較的、日本でよく知られているのがトランスジェンダーであるように思います。トランスジェンダーは、身体の性別と、自分が認識している性別が一致していない状態です。日本では、ドラマでとりあげられたことによって、知られるようになったのではないのでしょうか。例えば、身体は女性、戸籍上も女性であるけれども、女性の制服を着ることや、女性として生きることに違和感があったり苦痛を感じたりするという状態ですね。実際には、トランスジェンダーにもさまざまな人たちがいて、性別がいまいであったり、決められないといったりという人もいます。このような単純な説明では不十分なですが・・・。一方、レズビアン、ゲイ、バイセクシユアルについては、一見、知っているようでいて、誤解も

は異性である男性とつき合うことが、まったく楽しくないのだからということでした。でも、誰にも相談できません。その時に、もしかしたら自分は、同性と一緒にいるほうが楽しいのかなと思ったのです。

そのころはまだインターネットも普及していなかったので、自分が何者なのかを確かめる術もなかったし、自分を確かめることが怖かった。自分を認めると、人生に恐ろしいことが起こるのじゃないかと、自分の気持ちにふたをしたままでした。1993年、私が18歳のときです。

渡辺 それは大学のときですか。

尾辻 ええ。都会の大学ではなかったのですが、この地域にいたら何も情報が入らない気がし



尾辻かな子さん

自身を受け入れる大きなきっかけとなりました。

ただ結局、私は二重生活をしていたのでね。たとえばバーやクラブの中とかの限られた空間の中でのみ、自分の本当の姿を見せていて、そこから一歩出ると同性愛者であることを隠すという二重生活です。

なぜ私たちは自分自身のことを隠さなければいけないのか、自分のセクシュアリティに悩んだり受容できなかったりするのかわかなくて、同性愛者を気持ち悪くおかしな人たちだと思っている社会の人たちの目が、いちばん問題なのだと気付いたのです。だったら自分がこの社会の何をどう変えられるのか、どうにかしてこの社会を変えてみたいと、大学生のとき、議員インターシップに応募しようと思うように……

渡辺 尾辻さんの今のお話の中で、ちょっと乱暴な言い方ではあるのですが、重要だと思える内容がありました。大切なのは、セクシュアリティとは、人生とか生活ということなんだと。つまり、その人がどのように生きていきたいかということですよ。

尾辻 ええ。

渡辺 もちろん、誰かを好きになる、ということ、人生のすべてではないし、同性愛者であるということ、ある意味では、その人

て、都会に行こうと直感的に思いました。もちろん両親には別の理由を言って、実家の神戸に戻りました。そのとき、阪神淡路大震災に見舞われたのです。当時は1月15日が成人の日でした。

渡辺 15日が成人式で、翌々日に大震災が。

尾辻 そのとき私はアルバイトをしていましたが、アルバイトさきも私が通った高校も、地震でつぶれました。明け方の5時に発生しましたが、もし日中にアルバイトをしている時間帯だったら、私も命を落としていたでしょう。そして、人生ってどのように終わるのか、本当にわからないものだと感じました。人生の最後の時を迎えた時に、自分の人生を振り返り、自分に嘘をついて生きてきたと振り返りたくないと思いました。

渡辺 そうなんです。私は阪神淡路大震災の時に大学生として東京にいましたので、軽々しく何か言うことはできないんです。ただ、震災を経験されたかたからは、震災が人生に大きな影響を与えたというお話をよく聞かれますね……

尾辻 そこから本当の自分と向き合おうと。そして違う大学に行き直し、そのとき入ったサークルの女性に恋愛感情を抱いて、そういう自分を否定することができず、自分と向き合うことになりました。自分自身へのカミングアウトに18歳から5年くらいかかりました

ね。

渡辺 長い時間、ご自身と向き合われてきたのですね。

尾辻 当時、ようやくインターネットが普及しだして、大学の情報処理室の片隅で、誰にも見られないようにモニターを反対側に向け、もし誰かにみられたら、すぐ画面を変えられるように、同性愛という言葉を検索しました。

そこで、レズビアン・バイセクシュアル女性の集まりがあると知り出かけて行って、同じような思いを持っている人たちと出会えたことで、はじめて自分のことが話せるようになりしました。

渡辺 インターネットが今ほど発達していない時代ですから、大学からアクセスするほかには、情報を得る手段がなかったでしょうね。マイノリティにとって、身近に共感して語りあえる人を見つければ難しいですから、情報にアクセスできるかということ、とても大切ですね。他のセクシュアルマイノリティと出会えたのが23歳のときですか。

尾辻 そうです。やっと自分の感情をしゃべることができるようになり、それからジェンダーとかセクシュアリティということを学びはじめました。

行き直した大学が京都にあったので、京都の大学コンソーシアムによっていろんな大学のジェンダー論を学べた。このことも、自分

の一つの側面だと思います。ただ、恋人・パートナーが同性だということ。それなのに、同性愛者という一点をとらえて差別され、学校でいじめられるとか、職を失う危険がある社会はおかしいです。そのために自分を偽らなければならぬとなると、本当の自分の人生を生きていくことができない。誰もが自分らしく、ありのままに生きられる、これは基本的人権の問題ですね。

尾辻 そうです。

同性パートナーシップの法律がない日本

渡辺 セクシュアルマイノリティの問題を、なぜ語らなきゃいけないのかを考えると、その人の生き方というものですよね。

尾辻 同性愛者と同性愛者ではすごく差があつて、たとえば大学に入って誰かを好きになつてつき合うといったとき、異性愛の人は隠さなくていいし、人前で手をつなぐことも許されている。でも同性愛者の人が手をつなぎたいと思っても、手をつないだその瞬間から白い目で見られる。こういう人たちもいるよね、というふうにはならない。

渡辺 たしかにそうです。

尾辻 まったく一緒、平等ではない状況があります。日本には同性パートナーシップ法な

どはありませんが、アメリカでは昨年、同性婚という結婚の平等が全米の州で認められるようになりました。ではこの同性パートナーの法的保障がないと、何が困るのか、です。それはたとえば病老死の問題です。お互いの関係を秘密にしておくと、相手が入院した時に病室に入れてもらえなかったり、パートナーが亡くなつても財産を相続できないとか、さまざま不具合があつて、それは政治的課題だと気付くようになりました。

私、先日、朝日新聞を開けてびっくりしたことがあります。18歳から選挙権が認められるようになり、AKB48の3人のメンバーが、憲法学者の木村草太さんと政治の仕組みを学ぶシリーズなんです。「同性同士の愛、なぜ切ない歌に？」と記事になっていました。

渡辺 つまり、誰と一緒に生きていきたいの

かという生涯のパートナーを選ぶときに、なぜ異性でなければならぬのか、同性同士で何がいけないのかと質問を投げかけると、「勝手に暮らしているぶんには何も問題ない、私は差別なんかしていないし、そういうカップルがあっても、とくに何か法律のようなものは必要だとは思わない。何でそんな勉強をしなきゃいけないの」——10年前、学校でセクシュアルマイノリティの話をすると、そういう答えが返ってきました。

尾辻さんがさきほどおっしゃったように、パートナーが病気になる時や亡くなったときの問題です。病院で手術するとき家族でなければ説明を受けられなかったり、長年一緒に暮らしていたとしても、最期を看取



渡辺めぐみさん

う向き合うかというテーマで講義をしています。私より年上のかたにお話しすると、セクシュアルマイノリティという言葉すら知らない人が多い。あるかたから匿名でご感想をいただいたことがあるのです。じつは自分はセクシュアルマイノリティだ、自分が子どものころ、学校でそういう授業をしてくださる先生がおられたら救われたのに、という声です。でも、講義を通じて、学校の先生方は、セクシュアルマイノリティの問題について知ることができてよかった、とおっしゃってくださいますね。学校教育のなかで、セクシュアルマイノリティの子どもたちにポジティブなメッセージを送ることは大きな効果があると思っています。子どもたちから、意味もよくわからず、「レス」とか「ホモ」「オカマ」といって笑うことが日常的に行われていますが、そういう言葉は蔑称だから使ってはいけない、と伝えることが必要ですね。そして、マジョリティと違って、どの子ども自己を肯定して生きていけるよう、教育現場はがんばらなければなりません。

尾辻 教育がこの課題に取り組むことは非常に重要です。去年、イギリスに行ったのですが、イギリスでも同性婚が認められています。今、日本でレズビアンをカミングアウトした議員はひとりですが、イギリスではLGBTの国会議員が5%になりました。国会議員

することもできないかもしれない。いろんな問題が起こります。とくに、震災のときには、個人情報保護の問題になります。法律上の「家族」でなければ安否を確かめることすらできません。こうして考えると実は「家族」という関係は法律的に強い結びつきです。私たちは生まれてくるとき、親を含めて家族を選ぶことはできません。しかし、結婚というのは、「他人」をひとり選んで家族にすることです。誰しも、新たな家族をつくる権利が与えられているということです。しかし現在、結婚相手は異性から選ばなければならないことになっています。でも、新たな家族はなぜ異性でないとつくれないのか。成人同士が家族になろうと合意したのに、それが同性同士だからといって認めないのはおかしいと。家族社会学者としてずっとそういう疑問があったわけです。

尾辻 その通りだと思います。おそらく2015年がひとつのターニングポイントになるかなと思っています。

日本でも東京都の渋谷区や世田谷区、宝塚市、那覇市など自治体が動きました。渋谷区では「男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」が区議会でも可決され、パートナーシップ証明書が交付されるようになりました。世田谷区も同性カップルに宣誓書の受領書を発行しています。自治体の動きに背中

の中にも当事者が当たり前にいる国に行くのと、カミングアウトはじつにさらっとしたものです。たぶんこれから今の10代の世代の皆さんは、自分のセクシュアリティを隠さず、オープンに生きる人が増えると思います。その分、友達にカミングアウトされることも多く経験することになります。友達にカミングアウトされたら、そのことをちゃんと受けとめるということが大事です。何か困っていることではないかとたずね、一緒に考えていくとか、できればその子の恋愛相談のつてあげられるような友達になってほしいなと思います。自分の本当のことを知ってもらって友達になりたいということなので、信頼されているんだなと受けとめてほしい。もし自分に付き合っていると告白されたとき、断つたら心に傷をつけるんじゃないかと思うかもしれませんが、それは男女の恋愛も同じなので、断ることがいけないことはありません。

渡辺 やはり自分は何者かということを知ってほしいというのが、カミングアウトの意味だと思いますが、今の日本はそういうことに関して過渡期にありますね。

尾辻 たしかにそうです。大学時代に友達にカミングアウトしたら、その友達はショックで一晩眠れなかったそうです。カミングアウトして驚かす気はなかったんだけどね。でも自分の周囲にそういう人がいることを知る

を押されるように、国会でも立法が議論されるようになってきたと思います。

渡辺 法整備を進めていくためには、やはり、マジョリティがこの問題について知ることが必要ですね。

尾辻 私は渡辺先生の授業のときにしゃべらせてもらって、あとで感想をいただくときに、やっぱり変わってきたと思うのが、自分のまわりにそういう人がいるということを書いてくれる学生さんが、非常に増えてきたことです。LGBT(レズビアン・ゲイ・バイセクシャル・トランスジェンダー)のマイノリティの数は3%から7%、左利きの人と同じくらいだと言われていますから、自分の身近な友達だったり、高校のクラスメイトだったり、そういうようにまったく知らない誰かじゃなくなってきた。

変わりはじめる早い

渡辺 私もこの問題と出会って20年ちかくなり、教えるようになって10年。たしかに急激に変わってきましたね。最近の若い人で、カミングアウトする人が増えてきました。しかし、これでじゅうぶんかと言うと、そうではありません。たとえば、私は教員免許更新講習で、学校の先生方を対象に、学校教育の中でセクシュアルマイノリティの子どもとど

ことで、社会人になってゲイの友達ができたとかで、その人自身も世界が広がっていきました。人間関係がすごく多様になるきっかけが作れる。

渡辺 やっぱり二重生活ではなく、本当の自分として友達と話し合いたいし、嘘のない人間関係を築いて仲よくなりたい。その人になら本当のことを話してもだいじょうぶだろうという気持ちで、思いきってカミングアウトしてくれた。その気持ちを受けとめて、そのことについて話し合おうということ。そして友達関係が深まっていく。

尾辻 カミングアウトを誰にと考えたとき、家族には言えないし。学校の先生にも言えない。やっぱり友達ですね。

渡辺 尾辻さんが男性が多い政治家の世界でカミングアウトされたのは、すごいことですね。当時、学生でも友達にカミングアウトできる時代ではなかったのではないかと思いますがいかがですか。

尾辻 私自身は学生時代、ゼミの友達にカミングアウトしていましたが、親にも言っていました。2005年、議員としてカムアウトして、新聞にのったり、本(『カミングアウト』自分らしさを見つける旅)を出版したりで、どういう反応が返ってくるか、暴力にあたりするのじゃないかと、怖い部分がありましたね。でも感謝のメールをいっぱい

尾辻かな子さん



もらいました。言わないと可視化できない問題、見えない人たちの見えない問題を見える存在にしたことで、カミングアウトしてくれてありがとうという感謝とはげましのメールが、何百通も私に届きました。

そのとき、テレビ番組が街の人にアンケートをとったのですが、いちばん多い答えが「いいんじゃないですか」でした。でも、それは、自分の家族でなかったらという前提ですね。身内のことになれば自分の子であれば受け入れられるけれど、外には言ってくれるなど、内と外の使い分けを感じました。

渡辺 でも変わりはじめると、日本はとても早い。

尾辻 安室奈美恵さんが「できちゃった婚」

をしましたね。それまで結婚する前に妊娠するというのは倫理的にいかがなものかという風潮が強かったのですが、今は妊娠することで結婚する「できちゃった婚」の人たちが増えていきます。もうそんなに隠さなきゃいけないことではなくなりました。名称も「おめでた婚」になりました。すごい変わりがたの早さですよ。

私の仮説ですが、アメリカでは2004年に全米の州の中でマサチューセッツ州に初めて同性婚を認める法律ができ、2015年にはすべての州で認められるようになりました。たった11年で達成したのです。そういう例を考えると、ここ10年で日本も大きく変わっていくように思えます。

渡辺 ぜひそうやってほしいです。ただ日本は家族の壁というか、建前が強いところがありますので。以前このような話を聞いたことがあります。記憶を頼りにした大雑把な話ですが。アメリカのある女子大の授業で、「家族や友人に、自分がレズビアンであるというウソのカミングアウトをして、そのまま一週間訂正しないでいられるか」という実験をしたそうです。学生たちは、「私も、家族も、友人も、レズビアン差別などしない」と考えていたのでしょう。しかし彼女たちが「自分はレズビアンだ」とウソの宣言をして当事者の立場に立つてみたら、さまざまな差別を経

験し、一週間も実験を継続することはできなかった。「レズビアンだとカミングアウトしたのはウソだ」と言わざるを得なかったわけです。よく「日本は同性愛に寛容だ」という人がいますが、果たしてこんな実験をしたらどうなるでしょうか。私の授業ではとてもこんな実験をしようなどとは言えません。そもそも私自身、こんな実験に参加できる気すらしません。

誰もが自分らしく

尾辻 でも、ちょっと他の人と違った特性をもっているマイノリティだから、隠さないと生きていけない社会というのは、非常に生きづらい社会です。人には自分と違うように見える人や、自分とは違う物の見方を排除したいという気持ちがありますが、ではどうして自分と違うというだけで怖いと思ってしまうのか、その原因はどこにあるのかを、自分の中で考えてほしい。知らないことが原因であることも多いです。

マイノリティがマジョリティに合わせないと生きていけないという社会が、本当に生きやすい社会なんでしょうか。自分らしく生きられない社会、それは同性愛ということだけに留まりません。誰もがどこかで何らかのマイノリティになる可能性がすごくあるわけです。たとえば国籍の問題もそうですし、発達障がいもそうだし、だれもがマイノリティになる部分をもっていると考えたときに、それは誰かの問題じゃなくて、みんなの、私たちの社会の問題なのです。

ですから自分がマジョリティだから見えなかったという部分、マイノリティの人と出会ったことで世界が広がっていきます。

渡辺 そうですね。多数派にとって都合のい



渡辺めぐみさん

い社会が作られている中で、誰もがマイノリティになる可能性がありますし、やはりお互いがわかり合い、共感し合ってつながる。

尾辻 同じ学校にいる仲間、同じサークルにいる仲間だったり、バイトで一緒だったり、

共通点をいっぱいもっているはずなんです。そういう共通点がたくさんあって、話せることもいっぱいあります。ピアで安心できる場所も必要ですが、それと同時に他者と共通点を探しあう、そういう目線もすごく大事です。

渡辺 健康だった人も病気になるるとき、同じ病気で苦しんでいる人の気持ちがわかるようになりますよね。

尾辻 あたり前だと思っていたことが、あたり前じゃなくなったりとか、あたり前の大事さを知ったりとか。今、私は医療と福祉の現場にいます。今、私は医療と福祉の現場にいます。今、私は医療と福祉の現場にいます。今、私は医療と福祉の現場にいます。

渡辺 先ほど変わるときは早いとおっしゃいましたが、それは尾辻さんのようにマイノリティの声を社会に発信されてきたという、つみ重ねがあったからです。

尾辻 社会を変えようと、すごい遠い感じがしますが、自分のまわりの人をマイノリティにフレンドリーな人に変えていくこと

で、すぐには変わらないかも知れませんが、大きな影響となって出てくると思うんですね。私がなぜカミングアウトしたかと言うと、次の世代の人たちが自己否定したりして悩まないようにとの思いからです。自分がマイノリティだからとあきらめるのじゃなくて、議員でもカミングアウトした人がいるのだから、自分も何かできるかも知れないと思ってもらおう。そして、たとえばパレードや映画祭など各地でやっているの、そのボランティアに行こうとか、渡辺先生の授業をうけて、もっと勉強しよう(笑)とか。

そして、学校の中に安心安全な場所、自分のことが言える場所づくりを龍谷大学でもぜひ実現していただきたいです。

渡辺 私も授業の中でマイノリティの問題をとり上げていきたいです。私も尾辻さんから最新の情報を採り入れさせて頂きます。そうして悩んできた人たちに、「何もおかしくないんだ」と自己肯定してもらいたいと思っています。

尾辻 ええ、それでカミングアウトできるようなになったら、次はあなたが大学をどのように変えられるのか、学生のために勉強会を先生と一緒に開いてみると、変える側にまわって、やってほしいなと思います。